スーパー・バック・トゥ・ザ・フューチャー

高岡教区　太田 浩史（おおた ひろし）

子どもたちと聞く法話

友人の科学者がタイムマシンの研究をしています。タイムマシンの名前は「バック・トゥ・ザ・フューチャー号」。カッコいい自動車みたいな形をしていて、「ウワーン！」とうなり声をあげて走り出すと〝フッ〟と消えます。ところが設計がうまくいかなくて、とんでもないところへ行ってしまったんです。

「バック・トゥ・ザ・フューチャー号」が停止すると、青い霧が晴れて、立派な作りの門があらわれました。その前に一人のスーツ姿のイケメンが立っているんです。よく見れば頭のところに小さなツノがあります。

「ここはどこですか？」

「ここは地獄でございます。私は案内役の鬼で、名前は鬼塚と申します」

「ええっ！、地獄？どこで間違ったんだろう」

彼はあわててこの世界にもどってきました。でも、何べんやっても地獄に行ってしまうんです。彼は「乗ったら必ず地獄へ行ける車」と宣伝して販売したんですが、一台も売れません。でも研究を重ねた結果、今度は極楽にも行けるようになったんです。ニューモデルを「スーパー・バック・トゥ・ザ・フューチャー号」といいます。彼はさっそく地獄に向かいました。

「今度はいつでも極楽に行けるんだから気楽なもんだ」

友人は鬼塚の案内で地獄の門をくぐりました。

「けっこうきれいなところだね」

「設備なら極楽なんかに負けませんよ」

「でも、鬼がいじめるんでしょ」

「鬼たちは閻魔大王から、お客様を神様としておもてなしするよう命令されております」

「おどろいたな、地獄に行けば神様になれるのか」

「あれが食堂でございます」

天井に大きなシャンデリア。テーブルをはさんで、向かい合って食事するようになっていました。ものすごいごちそうの山で、お肉もお魚もお菓子もなんでもそろっています。ところが、地獄の人たちはみんなやせ細り、「悲しいよー！」「苦しいよー！」と泣いているんです。よく見ると、地獄のお箸とスプーンとフォークはとても長くて、一メートルもあります。ごちそうを食べようにも、どうしても口まで届かないので泣いているのです。

「短くすればいいじゃないか」

「長いのには理由があるんです。苦しいのはお客様の自己責任ですから」

友人は鬼塚の言うことがよくわからず、極楽に行ってみることにしました。極楽の門の前には一人のかわいい少年が立っていました。

「地蔵の真ちゃんだよ」

「お地蔵さまなの？キミは」

友人は真ちゃんの案内で門をくぐりました。

「地獄のほうが立派だったな」

「地獄に人口が集中して、極楽は過疎化が進んでいるんだよ」

「地獄にくらべて宣伝がたりないんじゃないの」

「でもここは楽しいよ。あれが食堂さ」

かんたんな造りで、ごちそうも地獄ほど多くありませんが、どの人も血色がよく、とても明るい雰囲気でした。おどろいたことに、お箸とスプーンとフォークの長さは地獄のとまったく同じです。ところが人々はごちそうを自分の口に運ばず、向かい側の人たちに食べさせるのです。すると向かい側の人たちが「お返しです」と言って食べさせてくれます。地獄ではみんなを苦しめる原因だったお箸やスプーンやフォークの長さが、ここではテーブルの上のどのごちそうにも手が届く便利な役目をはたしていたのでした。

「長いのはこのためだったんだ。鬼塚が自己責任と言ったのはこういうことか」

真ちゃんは笑いました。

「実はここも昔は地獄だったんだ。でも親鸞さまという方がやってきて、みんなに長いお箸やスプーンやフォークの使い方を教えると、たちまちここが極楽に変わってしまったのさ」

すっかり納得した友人はこの世界にもどってきました。すると人々がたずねました。

「地獄と極楽の違いは何ですか？」

「気のもちようさ」

と友人は答えました。

「タイムマシンはできないかもしれない。でも地獄を極楽に変えられるのだから、この世界をよくするぐらい何でもないよ」

2016年子ども報恩講のつどいにて